

STATEMENTS 21
1
2020

行動するシンクタンク
一般財団法人 下関21世紀協会
Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

「繋ぐ」街

一般財団法人下関21世紀協会 理事 原 和人

経験のない時代

祝祭ムードのカウントダウンがスタートした東京”の”オリンピックとは裏腹に、世界情勢や政治も含めて、何となくこれまでの経験にない不安を感じるなか、「現代社会の幼児化」という言葉がTVで言われていた。それは、社会への不安の中で自らの成長を拒否した退行欲求で、そこには異なるものへの恐怖があるとのこと。

SNSで情報があふれる中、自分の必要とする情報のみを断片的に取り入れ、それ以外は排除をしていく。イエスカノーか、今、ここ、私が大事。自分がよければいいという価値観。母の温もりの中でぬくぬくと生きていきたいという母性社会の中での幼児化である。世界の国家もしかりである。全体を見渡し、多様な価値観の中でコミュニケーションをとりながら色のつかないグレーの部分を究明して成長してきた、父親のたくましさを持った父性社会。いわば、火を囲み「輪」になって多様な価値観を一つにしてきた「和」のくにづくり、人の気持ちを思いやる日本の「和」の心とはまったく真逆の社会である。

そんな社会の中で、地方都市は少子高齢化が猛スピードで進み、職人不足、働き手不足が深刻さを増し、空き家がどんどん増え、過去の経験が生きない時代になってきた。逆に、過去の経験が「何とかなるのでは」と、足かせになって現実を直視せず、じわじわと足元から蝕まれていく。気が付けば手遅れでまちがなくなってしまった。という恐怖が、心の底にある社会への不安の一つでもある。

まちがどう生き残っていくか

さて、そんな時代をどう生きていくのか。こういう時代だからこそ、まちも、ひとも全体を見渡す価値観の高さ、いわゆる判断基準のレベルの高さが必要とされるのではないだろうか。価値観を高める方法は、多様な価値観に触れること、価値観の高い人に出会い感動することでしか高められないと言われている。母性社会の温もりの中で生きていては、決して高い価値観に到達することはできないのである。

今更、と遅きに失するかもしれない。遠回りかもしれないが、



もう一度、映し出された風景の中にある地域の歴史や文化を深く観る、いわゆる「景観」の大切さを感じるのである。そこに暮らすひと、生きるひと、伝統やしきたり、それぞれの地域に根付く文化の本質を知ること、理解することで、経験のない時代を生き残っていく「生き方」が見えてくるのではないだろうか。逆に言えば、そのことをしっかりと理解しなければ生き残る術を見つけだすことはできないのかもしれない。

まちの誇り

協会が進めている「新選しものせき誇り100選」。多様な価値観を見極める作業である。多くのひとの心にある価値観を抽出し、その価値の本質は何なのかと深く思い悩むことこそ、この事業主体の本質ともいえる。30万人の中核都市としてスタートした平成の合併時、その前後にしものせきの誇り100選、豊関のほこり100選という事業を行った。そのころは、豊かな自然や歴史、文化が新しい我がまちの誇りになるという喜びの反面、まちが大きく一つになったために地域の文化や歴史がすたれていくのでは？という危惧を抱いていた。今、まさにその危惧が現実化し、地域コミュニティも崩れかけている。そういった時代にもう一度、多くのひとが持つそれぞれの誇りを理解し、まちの誇りとして「かたち」にすることは、歴史や伝統、文化を「繋ぐ」ことでもあり、これからのまちの「生き方」を見出す作業でもある。



「繋ぐ」まち

ひとはそれぞれ色々な襷を次の時代へ、次の世代へと「繋ぐ」役割を担っている。しかしながら「繋ぐ」という意識をしっかりと持たない限り襷を「繋ぐ」ことはできないのである。襷がつかないまちは、ただただ、時代の下り坂を勢いを増しながら転がるだけである。現状を維持しながら成長していく糧を見出し襷を繋いでいくことが、今を生きる我々の役割ではないだろうか。

誇りを持って生きるひとがこんなに多いまち。下関は素晴らしいと多くのひとに感動を与え、他のまちから羨望されるまち。そんな価値感の高いまちに「ひと」や「もの」や、「こと」が集まるのではないだろうか。

自然が豊かで歴史や文化に満ち溢れた価値感の高い下関で生きたい。ひとがやさしく、まちは花いっぱいにあふれ、夏には海峡花火もみれるまち。そんなまちに暮らしたいと多くのひとが思えるようなまちに「繋ぐ」ことが大切である。

数々の歴史の転換期に登場した下関。大きな時代の転換期を迎えている今、「誇り」を持つ価値観の高いこの下関の力を「繋ぐ」ことで再び歴史の舞台上に登場できると信じている。

(絵 原和人)